

福祉学科の教員
それぞれの専門領域や研究テーマ

- 01 目の前の人にまなざしを向け続け、
いろいろな形の対話を探究する (星野俊弥)
- 02 韓国の老人福祉館における
社会活動を通じた介護予防 (金美辰)
- 03 災害に備えた福祉のまちづくり (飛田和樹)
- 04 HR (Heart Rate) から運動処方を考えよう (上野優子)
- 05 生活困窮者の人権保障のために必要なこと (嶋貫真人)
- 06 ソーシャルワークは難しいけれどやりがいがある
(丹野真紀子)
- 07 介護福祉学におけるアセスメントの重要性
(原野かおり)
- 08 福祉サービス利用に伴う迷いとその背景 (井上修一)



目の前の人にまなざしを向け続け、 いろいろな形の対話を探究する

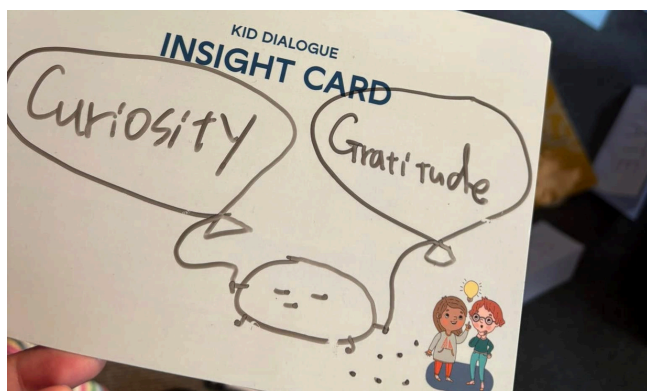
精神科医としての関心とオープンダイアログによる対話実践

私はこれまで、精神科医として総合病院の精神科や地域の精神科外来クリニック、訪問診療のクリニックなどで働いてきました。メンタルヘルスの領域で活動する中で徐々に自分が違和感を感じ始めたことがあります。それは、専門職として学び、知識や技法が多くなっていくと、困りごとがある人の話にただしっかりと耳を傾ける前に、専門家としてのジャッジをしてしまうようになることです。これは、困りごとを持っている人からすれば嬉しいことではありません。自分の話を十分にきかれないままに、「あなたは〇〇という症状があり、△△という疾患です」と一方的にジャッジされることが嬉しいはずがないのです。



その人が、どのように困っていて、どのような気持ちになり、感情がどのように揺れているのか。他者の体験は、専門職であるなしにかかわらず、しっかりと耳を傾けたとしてもわかり切れるものではありません。それでも、目の前の人困りごとをなるべくわかろうと、まなざしを向け続けること。これは対人的な行為としてとても基本的なことです。

以来、私は、フィンランドで生まれたオープンダイアログという話のきき方や世界観、サービスシステムの構築の仕方に関心を持ち、学び、実践をするようになりました。現在は、いろいろな形の対話を探究することが私の専門家としての関心ごととなっています。



写真は、フィンランドへ対話実践の見学に行った時に撮影したものです。フィンランドのヘルシンキでは、福祉、医療だけでなく、市民みなで対話を大切にしようとする流れがあります。就学以前の子どもも、「キッズダイアログ」という形で、カードなどを使いながら対話に取り組んでいます。

ころあたたまる時間でした。

韓国の老人福祉館における 社会活動を通じた介護予防



韓国と日本を比較できる立場から社会を考える

介護予防には、日常生活に充実感を持ちながら介護予防サービスを継続して利用することが求められることから、介護予防に繋がる社会活動の場や拠点など、日中に趣味活動などのできる居場所の重要性が指摘されています。しかしながら、先行研究において地域包括支援センターを中心に展開される身体運動プログラムの脱落率の高さや高齢者に適した居場所が必ずしもあるとはいえない状況にあるとされています。

高齢者の日常生活における幸福感の高さと介護予防は関連しており、高齢期に幸福な生活に送るためには、社会活動への参加が必要です。

そこで、高齢者の趣味や社会活動の拠点であり、地域高齢者の居場所となっている韓国の老人福祉館における社会活動を通じた介護予防について研究しています。



老人福祉館は、高齢者が自ら通える利便性の良い場所に位置していることが特徴の一つです。



老人福祉館は、地域高齢者の居場所であるため、社会活動をしながら長い時間いられるように安価で食べられる昼食が提供されることも特徴です。



災害に備えた福祉のまちづくり

地域住民・専門機関・行政で協働して、誰も取り残さないために。

私は地域福祉を専門としています。近年は、地域で活躍するボランティアの意欲や負担感と人間関係について研究しています。地域福祉はとても幅広いので、ここでは災害について取り上げたいと思います。

災害ボランティアが大々的にメディアに取り上げられるようになったので、ご存じの方も多いのではないでしょうか？ 発災後にボランティアを必要とする方と、全国から集まった災害ボランティアの方々をコーディネート（マッチング）する役割も、実は福祉専門職が多くを担っています。

また、避難所等で災害福祉支援チーム（DWAT）として活動する福祉専門職もいます。

さらに、発災時に本当に誰も取り残さずに命を助け合うためには、いかに日頃から地域の中で住民同士や専門機関が関係を築き、備えるかが重要です。災害時に命を助け合うのは、消防や自衛隊より、そこで暮らす地域住民同士になります。そのため、地域福祉では災害福祉を切り口にして、住民同士や専門機関との関係づくりに取り組んでいます。



豪雨災害による土砂崩れで倒壊した家屋（右側）
居住できなくなり取り壊しを待つ家屋（左側）

実際に被災地で支援に携わった時の様子です。この時は、専門職として災害ボランティアのバックアップをしていました。（ボランティアさんに配る飲み物を運搬中）

➤➤➤➤

➤➤➤➤

ゲーム形式で学ぶ災害図上訓練（DIG）を地域住民の方と取り組んでいる様子です。ほかにもHUG（避難所運営ゲーム）など、多様なツールを活用しながら地域に働きかけます。



HR (HEART RATE) から運動処方を考えよう ～安全な運動指導のために～



地域の健康を目指す取り組み

人のからだや精神の源にあるのは、常に、「健康状態」があげられるでしょう。長寿大国ニッポンでは、平均寿命と健康寿命の差を、とにかく縮めようという取り組みが各地で行われています。人間福祉学科 ※（R8～福祉学科に変更予定）がある多摩地域でも、高齢者の数はとても多い状況にあります。私たち、福祉学科の教員は、各々の専門性を生かしながら、その知識や技術を少しでも地域の方々に還元して、この多摩地域を日本一の「大学&地域住民とのコミュニティ」として、日々、精進しています。今年度の取り組みとして、「本学多摩キャンパスと地域コミュニティとの相互作用 ～活性化と再現性への取り組み～」を行っています。



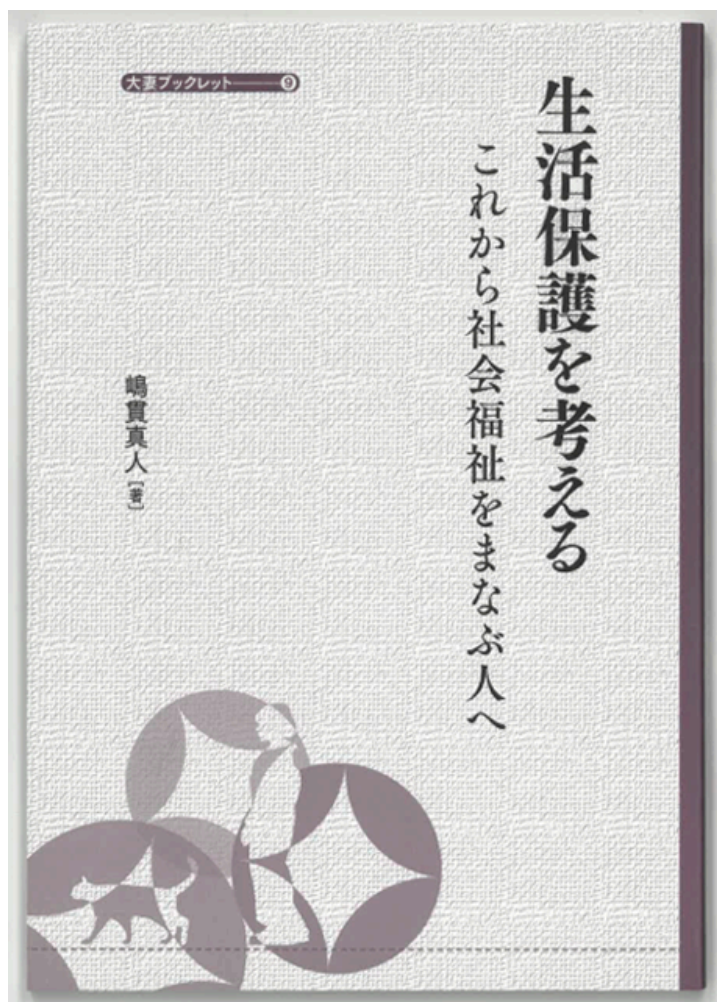
どんな時も、安全に配慮することを心がけています。いざという時のために、定期的に、心臓マッサージやAEDの取扱い方を学びます。

スマートウォッチをつけて運動開始！！「心拍数（HR:HEART RATE）」から、安全な運動指標を導きます。





生活困窮者の人権保障のために必要なこと



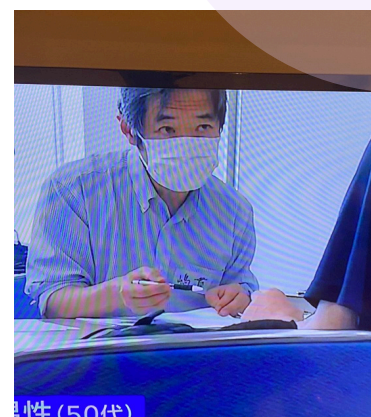
私は大学の教員になる前は、東京の福祉事務所で長く生活保護のケースワーカーとして働いてきました。生活保護実務を経験して最も強く感じたことは、「日本の生活保護法は貧困者の生存権を守る制度になっていない」という法制度の問題点でした。そして、このような大きな問題を抱えた制度をどうにかして変えていきたいという思いが発展して、やがて研究の世界に飛び込んでいくことになったわけです。

この本は、私のこのような制度改革に向けた思いを初学者向けにわかりやすく解説したものです。興味のある方は、ぜひご一読ください。

専門性を活かした社会活動

大学での教育・研究と並行して、ボランティアで生活困窮者に対する相談・支援活動を行っています。コロナ禍の収束後も、飲食店などで働いていた人々の失業は増え続けています。相談の現場では、どのような制度を使ったら生活を立て直していけるかについて助言し、場合によっては各種サービスの申請のために行政の窓口に行く際の同行もしています。

※右写真は、活動の様子がメディアに取り上げられたものです。



ソーシャルワークは難しいけれど やりがいがある



医療ソーシャルワーカーから研究者への歩み

もともとは医療ソーシャルワーカーとして医療機関で働いていました。その時は、一人一人の患者やご家族と向き合い、病気をもちながらも生活を続けなければならない方たちを支援することにやりがいを感じていました。大学教員になってからは、直接患者さんに関りはなくなりましたが、多くの社会福祉士を育成することで、間接的にはありますが、困難を抱える方の支援を担えていることに喜びを感じています。最近では、相談面接をすることを苦手としていたり、困難なケースについてどのように支援を考えたらよいのかという相談を受けるスーパーバイザーとして、多くの社会福祉士や相談援助職の方とかわかっています。

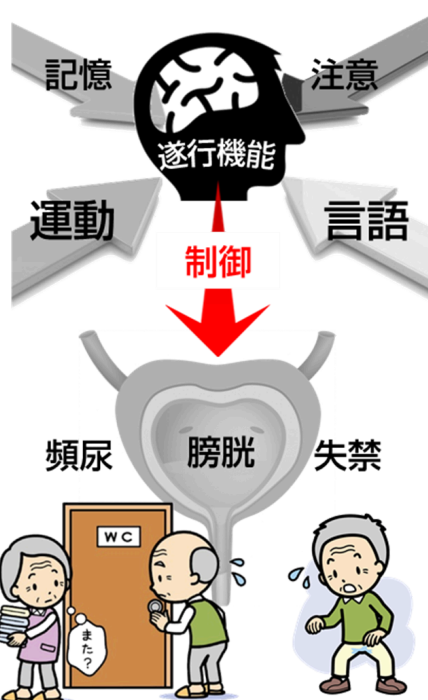
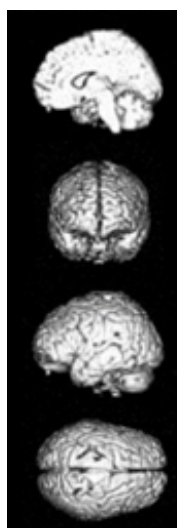
令和6年4月に困難な問題を抱える女性への支援に関する法律を施行されました。女性をめぐる課題が、生活困窮や性暴力・性犯罪被害、家庭関係破綻など複雑化、多様化、複合化している中で、女性支援機関（女性相談支援員、女性相談支援センター、女性自立支援施設）の支援員は、専門的かつ新しい知識と技術を常に習得し、日々の支援に当たることが求められています。女性支援に特化したスーパーバイザーが少ない中、女性支援に関わることも増えてきました。



介護福祉学におけるアセスメントの重要性

高齢者の排泄の困りごとを科学的根拠に基づいて予測する

MRIによる脳画像



脳（遂行機能）と排泄行為の関連図

私の専門分野は、介護福祉です。看護師として、看護・医療福祉の視点を踏まえた介護福祉研究・教育に携わってきました。現在取り組んでいる研究テーマは、「高齢者の下部尿路症状を予測する遂行機能評価と介入法の開発」です。

排尿は3歳頃になると自立しますが、そのサインは①膀胱におしっこをためられるようになる。②おしっこがたまった感じがわかる。③歩けるようになる。④下着の上げ下ろしができるようになる。⑤保護者に教えてもらったことができる、マネできるようになるなどです。完全に自立すると、はずかしい、人には知られたくないという側面があります。

尿は、血液を腎臓で濾過して膀胱にためられますが、脳の機能と複雑に関係しており、まだまだ分からないことが多い分野です。また運動機能との関係はもちろん、自尊心やQOLの維持・向上にもつながる奥深いテーマなのです。

現在取り組んでいる具体的な研究の内容は、高齢者の排尿の困りごと（下部尿路症状）の情報収集とアセスメントの方法と、介入方法を探るということです。

そのために①高齢者の排尿の実態調査をして、排尿の困りごとを予測する方法を検討しています。

②MRIによる脳画像解析を用いて下部尿路症状はどこに関係しているのか調べています。③排泄を自立継続できるための介入プログラムを検討します。まとめると、排泄以外のことから排泄の困りごとを予測やアセスメントして、自立支援する方法を検討する研究に取り組んでいます。



施設サービス利用に伴う迷いとその背景



入居者家族が抱く罪悪感や葛藤

特別養護老人ホーム（以下、特養）の入居者家族は、身内の施設入居に伴って、アンビバレントな感情を抱きます。そうした複雑な感情を「迷い」と捉え、当事者と家族の関係を研究しています。特養入居者家族の中には、罪悪感や葛藤を抱く方がいます。我々の調査では、在宅介護をしてきた家族ほど、「迷い」を抱える傾向にありました。その割合は、入居者家族の約半数だと推計されます。家族は、さまざまな状況に直面し、「迷い」の感情を抱きます。その背後には、悔いなく関わりたいという思いがあります。施設で過ごしていたとしても、家族のつながりを実感できるケアのあり方が求められています。



自分の未来のために「福祉」を学ぼう。

共生、多様性、マイノリティ。

いまでは「あたりまえ」になった言葉。

「福祉」からイメージしてもらえないけれど、

そこには、とてもたくさん、

ずっと「福祉」が大切にしてきた価値がある。

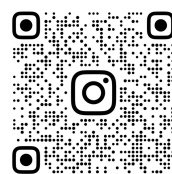
「福祉」には、これからの「あたりまえ」がある。

所在地 206-8540 東京都多摩市唐木田2-7-1

電 話 042-372-9198

メール sw-owu@ml.otsuma.ac.jp

H P <https://www.otsuma.ac.jp/>



FUKUSHI.OTSUMA